

巻頭言

実践型地域研究という志

東南アジア研究所所長 清水 展

東南アジア研究所は、2006年に京都大学に設立された「生存基盤科学研究ユニット」の一員として、化学研究所、エネルギー理工学研究所、生存圏研究所、防災研究所などとともに、人類の生存のための新たな科学として学際的「サステナビリティ学」にチャレンジしてきました。その一環として2008年から「生存基盤科学におけるサイト型機動研究」を開始しました。4年間の活動の成果の一端として本書が刊行されるのは、研究所の喜びであり誇りでもあります。

「サイト型機動研究」は耳慣れない言葉かもしれません。その意図するところは、京都大学が伝統とする地域研究の機動性を活かし、実際のサイト（現地・現場）に出て問題解決の実践と応用を図るものです（詳細については、「生存基盤科学研究ユニット」のホームページを参照（http://iss.iae.kyoto-u.ac.jp/iss/jp/outline_site.html））。

東南アジア研究所では、滋賀県の朽木と守山、京都府の亀岡の3カ所にフィールドステーションを設け、地域の人々とともに「実践型地域研究」を強力に推進してきました。活動の詳細は毎月発行のニューズレターに報告され、2008年11月の創刊から計41号を発行しています。

地域研究に実践型という形容詞が付されているのには大きな意味があります。よく使われる実践「的」ではなく「型」にした理由は、研究を行う地域の人々との対等な関係のなかで、地域がかかえる問題の解決や軽減のために協働してゆく姿勢を明確に打ち出すためです。それはプロジェクトを中心になって牽引してきた安藤准教授が掲げる理念であり、調査研究に関する彼の哲学でもあります（実践的という表現は実験室や他所での研究成果を応用してみる、という誤解を招きかねません）。実践型に込められた意図は、地域において問題の影響や被害を直接に受ける人たちの主体性を尊重し、その声を傾聴し、それに誠実に応答しながら研究を進めようとする態度の表明です。当事者性を尊重し互恵的で相互に啓発的な関係のなかで、地域研究者の側も変わる（正確には変えられてゆく）ことを含意しています。その態度は、望ましい開発協力のあり方を考え発言し続けたチェンバースが最後に到達した結論でもあります。チェンバースは、援助する側とされる側との力関係における主客の転倒が必要であることを強く主張しました。

私の専門である文化人類学のフィールドワークでも、安藤が実践型の基本として常々強調するように、村や地域「を」研究するのではなく、村や地域「で」研究することがほぼ合意されています。たとえば文化人類学者のギアツは、村や地域それ自体は研究の対象ではなく、特定のテーマや問題を最もよく研究することができるから現地に赴き研究すると説明します。しかし実践型地域研究では、研究の課題が抽象的あるいは一般的な学問テーマの考究ではなく、現地の当事者が直面する問題や課題、困難である点においてギアツの立場とは決定的に異なっています。

現場の切実な問題を、地域の人々とともに考え解決策を探ろうとする熱い志をもって試行錯誤してきた実践型の活動の成果が、本書をとおして地域研究に一石を投ずることを確信しております。